



写真6 見つかった古代東海道(紫色部分が道・平安時代初頭)

東海道に関わる遺構 高野遺跡の南端部にあたる六地藏地区では、歴史地理学の研究成果などから、古代東海道⁽¹⁾が横断していると推定されていました。そのルートは近世東海道⁽²⁾と異なり、栗東市伊勢落から栗東市手原の間を直線的に東西に通っていたと考えられており(図1参照)、令和2年度調査対象地の一部が推定地に該当しています。

検出された2条の溝跡の間には同時期の遺構が分布しないことから、道路に伴う遺構と考えられます(図2参照)。溝跡から奈良時代から平安時代初頭に使われていた須恵器や土師器、瓦などが出土したことから、道路は平安時代初頭を中心とした時期には機能していたことがわかりました。

- (1) **古代東海道**…古代の行政区画の五畿七道の内の七道の一つで、また、古代に置かれた官道。東国経営の交通路とされ、天武天皇のころ(7世紀後半)にほぼ成立していた。成立時は大和国(奈良県)から伊賀国(三重県)を通り、東国に抜けていたが、延暦3年(784年)の長岡京遷都以降に近江国を通過するようになる。伊賀国から東海地方を通り、常陸国(茨城県)に至り、陸奥国で東山道と合流する。
- (2) **近世東海道**…近世の五街道の一つ。慶長6年(1601年)に徳川家康の朱印状によって各宿に伝馬(荷駄や人を運ぶ馬)を出すことを伝えられ、宿場町の整備がなされた。江戸の日本橋を起点として、東海地方を通り、京の三条大橋へ至るルートを採用。

まとめ

古代東海道の推定位置において、東海道の南北側溝と考えられる溝を発見し、歴史地理学での想定を発掘調査で実証することができました。今回、高野遺跡で検出された南北側溝から出土した遺物は、8世紀第4四半期から9世紀初頭のものが主体を占めており、平安時代初頭に当地が東海道として機能していたことを表しています。

今回の調査において、手原―伊勢落間における平安時代初頭のルートを確認することができました。当地は野洲川や葉山川に挟まれた地域であり、近代まで両河川の氾濫による水害が起きていました。当地域は条里景観が色濃く残っていますが、乱れた箇所もあり、水害の影響と考えられます。古代東海道もそのような水害の影響を受けて、近世東海道の位置(高く安定した場所)に移転した可能性があります。

今回の調査結果では、平安時代初頭における東海道のありようを考えるうえで貴重な成果を得ることができました。

高野遺跡発掘調査成果説明資料

令和3年(2021年)1月28日(木)／公益財団法人滋賀県文化財保護協会



遺跡の概要と調査経緯

遺跡の概要 高野遺跡は栗東市六地藏に所在する遺跡です。野洲川の左岸扇状地に位置しています。昭和57年(1982年)の宅地造成に伴う調査が実施されて以来、複数回の発掘調査が実施されていて、縄文時代前期(約7,000～5,000年前)から近代にかけての遺構・遺物が発見されています。特に古墳時代(3～6世紀、約1,800年前～約1,500年前)には県内でも有数の大規模集落の広がりが確認され、古墳時代前期を中心とした時期の集落が形成されていました。また、遺跡の南端を近世東海道が通っており、高野遺跡の南端部には古代東海道が通っていたと推定されています。

調査の経緯 高野遺跡の範囲内において、滋賀県大津・南部農業農村振興事務所により六地藏地区ほ場整備工事が計画されたため、それに先立つ発掘調査に平成30年度から着手し、本年度も調査を継続中です。

調査の成果

調査の結果、古代東海道の側溝跡や古墳時代から平安時代の旧河道跡、古墳時代前期・後期の竪穴建物跡など、古墳時代から江戸時代にかけての遺構やそれらに伴って遺物が見つかりました。

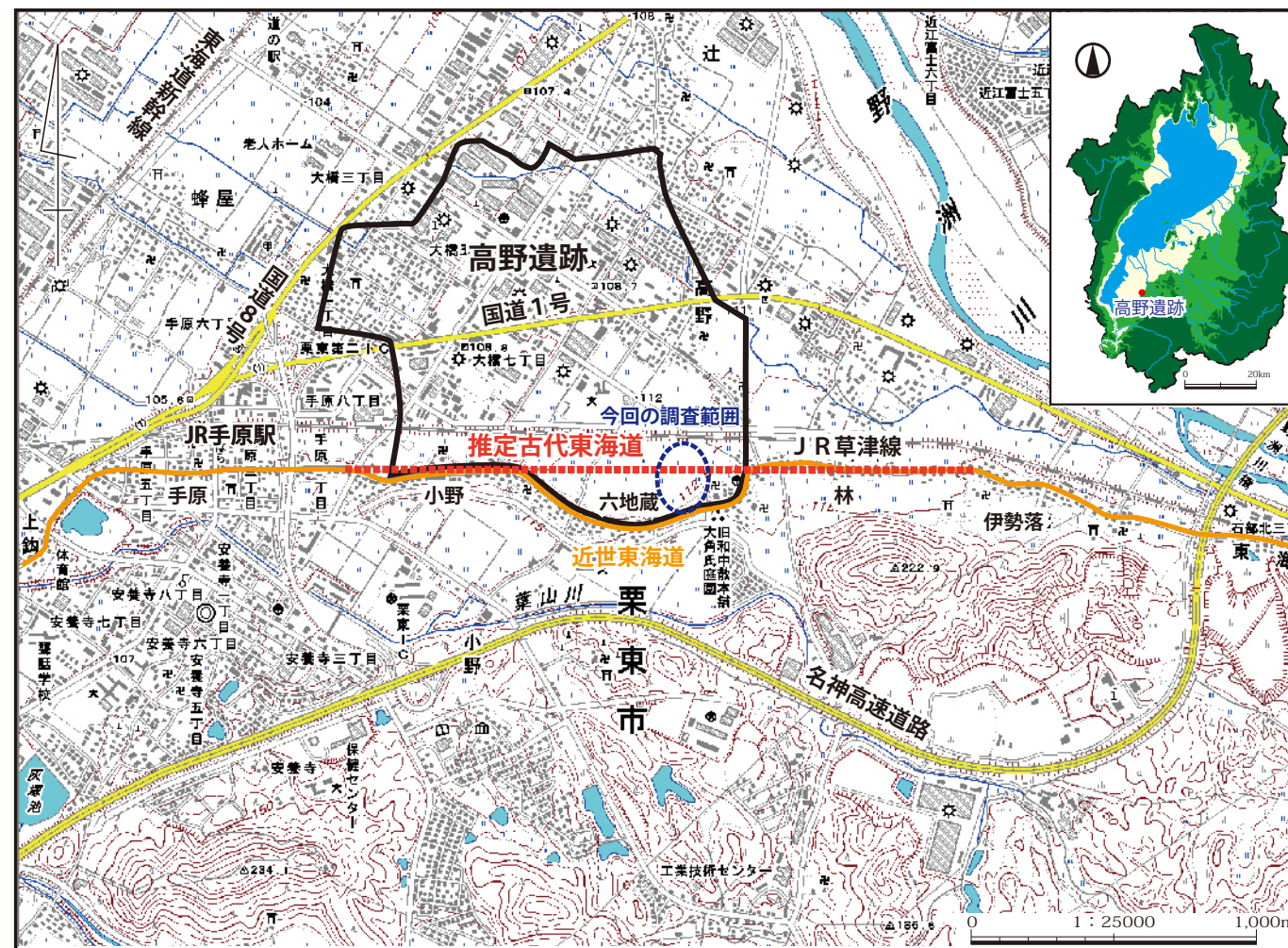


図1 高野遺跡の範囲(黒枠)と今回の調査範囲(青色破線)



写真1 古代東海道(人が立っているところが路面)

古代東海道側溝跡 調査の結果、その推定地において東西方向に平行して延びる2条の溝跡が見つかりました。溝跡の規模はいずれも幅約1m、深さが約20～50cmで、溝と溝の中心の間の距離は約16mを測ります。



写真2 旧河道跡(古墳～平安時代)

旧河道跡 道の北側では古墳時代から平安時代初頭までの旧河道跡が見つっています(写真2)。幅が約4～7m、深さは約50～70cmを測ります。



写真3 旧河道跡出土の須恵器
つきみ
坏身(古墳～平安時代)



写真4 旧河道跡出土の須恵器
ひらべい
平瓶(奈良時代)

この旧河道跡からは、古墳時代から平安時代初頭まで幅広い時期の遺物(須恵器・土師器・瓦・砥石など、写真3・4)が出土しています。特に西側からの遺物の出土が多く、かつ、不良品のような土器も見られることから、物資の集積場の可能性もあります。

旧河道跡からは土器以外にも、銅鋳石の脈石⁽¹⁾が出土しています。今年度調査区内で金属生産を行っていたとみられる遺構もありますが、これらについては調査中のため、その詳細は今後明らかになっていくものと思われます。

(1)脈石…鋳床中に存在し、経済価値がなく採掘対象とならない鋳物

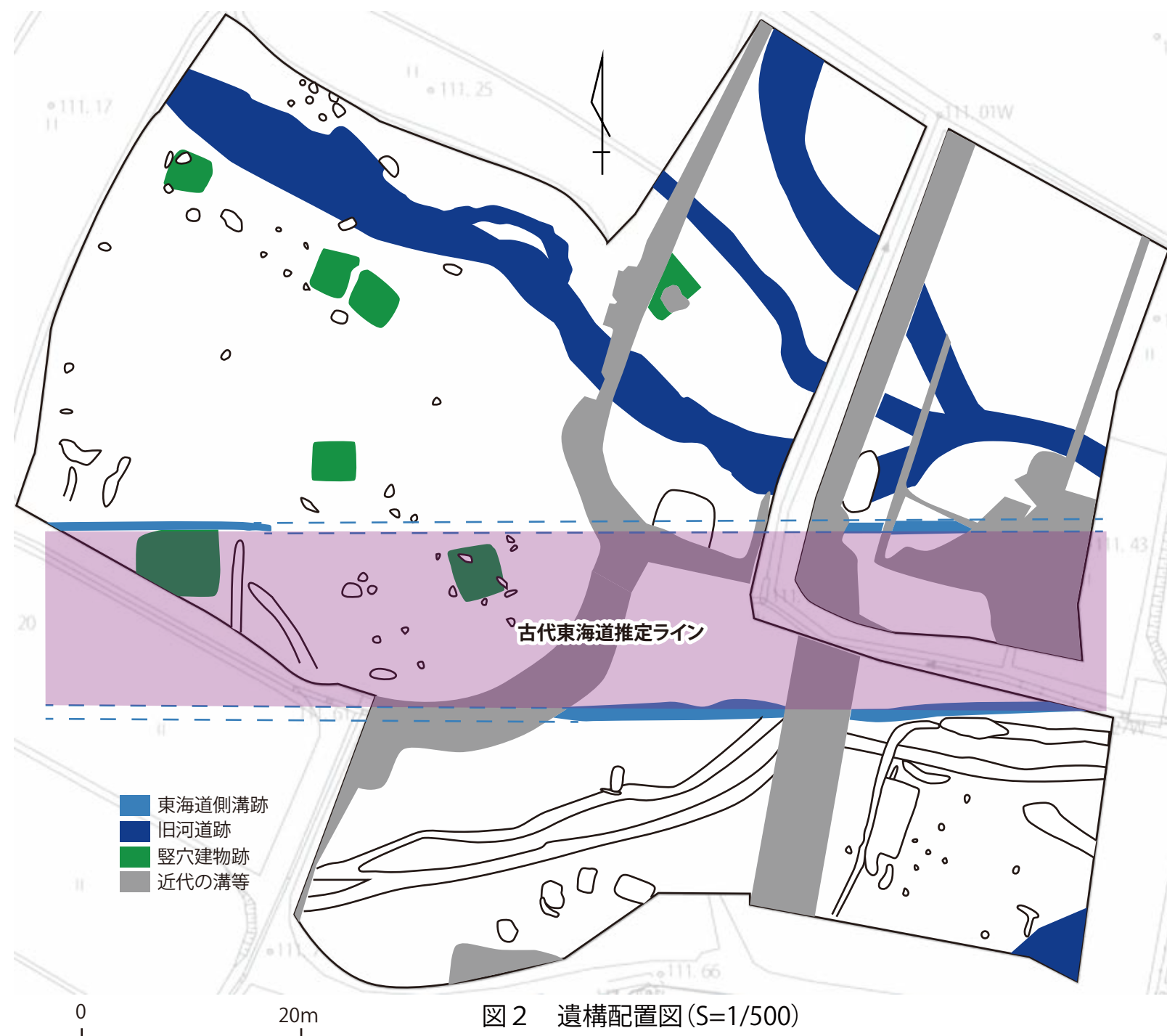


図2 遺構配置図(S=1/500)



写真5 竪穴建物跡(古墳時代前期)

竪穴建物跡 道が通される以前の遺構としては、竪穴建物跡が7棟見つっています。大半は一辺が4m前後の方形ですが、1棟だけ6mの例が検出されました。

古墳時代前期のものが2棟、古墳時代後期のものが5棟見つっています。7世紀前半までには埋没したと考えられます。